

第5回 楽しく振り返ることのできる生活

別府 哲 (岐阜大学)

べっぴん さとし/岐阜大学教授。自閉症児・者の発達や指導をライフサイクルを通して研究。著書に『自閉症児者の発達と生活ー共感的自己肯定感を育むために』『障害児の内面世界をさぐる』(以上、全障研出版部)など。現在、全国障害者問題研究会常任全国委員。



◎場面の切り替え

この意味では、浜谷直人さんが、場面の切り替えという切り口から興味深い仮説を出されています。近年、例えば遊びがやめられず給食に切り替えられない子に対し、給食の絵カードを見せて働きかけることが推奨されたりします。切り替えにくさの背景に、次の場面の見通しの弱さがあると考えるためでしょう。一口に切り替えにくさといっても原因は多様です。ですから、見通しの弱さがある一因である場合もありますが、それがすべてではないはずです。見通しが嫌な内容である場合、例えば偏食の強い子にとっての給食は、見通しがもてているからこそ拒否したくなります。大切なのは、子どもが次の活動に「切り替えようかな」と主体的に納得して思えることなのです。ここで紹介する浜谷直人さんの仮説は、活動の盛り上がり、盛り下がりを含めたその子の心理的時間の流れをとらえることで、主体的に切り替えようとする心の動きのメカニズムを検討しようとしたものです。

図をもとに説明します。子どもは、最初から盛り上がって遊ぶのではなく、遊んでいくなかで楽しさをだんだん感じ、盛り上がっていきます(図のA地点)。そして盛り上がりはあるところでピーク(B地点)となり、その後やや急速に盛り下がっていくこととなります。

この流れのなかで、子どもが切り替えを受け止めやすいところがあるということです。A地点はまだ盛り上がり

自閉スペクトラム症児者の心の理解



◎楽しい「活動」をやらせよう

自閉スペクトラム症で、トランポリンやブランコなど、身体の揺れを感じる活動が好きなお子さんがいます。それを考慮して、全身を使った活動を生活のなかに組み込んでいる学校、施設があります。しかしそういった活動を行うことが、そのまま子どもにとっての楽しさの保障につながるわけではありません。例えば、その活動を一日のどこに位置づけるのか、あるいはどの程度のダイナミックさで、どの程度の時間を保障するのかなどによって、その意味合いはまったく変わってしまうことがあるからです。

ある就学前の通園施設は、地方にあるからか、運動場を含めた敷地も比較的大きいところでした。そこでは朝、通園バスから降りてすぐ、子どもたちはそれぞれ好きな場所へ行き、一時間ぐらい自由遊びをします。トランポリンが好きな子は一時間、トランポリンで遊ぶ。その後朝の会が始まります。毎日その生活リズムが続くと、当初通園バスを降りる時に怒っていた子が、すっと降りトランポリンに走っていくようになります。一時間ぐらい活動できると楽しかった感覚を味わえるからでしょうか。数ヶ月たつと、落ち着きのないお子さんも、朝の会に比較的スムーズに入れるようになっていきます。

一方、ある特別支援学校では、登校直後に少しだけ自由遊びがありますが、すぐ着替え、朝の会に移ります。そしてその後メインの活動で身体を使った活動ーサーキット活動やトランポリンーをします。しかし子どもにとっては、朝の最初から「着替えをしなければいけない」「椅子に座らなければいけない」ことが続くからでしょうか、本当は好きなトランポリンのはずなのに、それがあるプレイルームへなかなか行けないことがありました。自閉スペクトラム症児者の好きな活動を大切にすると